

単純現在時制：認知意味論的接近

木内 修

0. はじめに

現代英語における単純現在形は、一体、どのような意味機能を文に対して果たしているのかを明らかにすることが本稿の目的である。「現在の習慣・状態」を単純現在形が担う基本的な用法と比べると(1)と(2)の例文は、周辺事例であり、学校文法などでもある種特別扱いしているものである。

(1) That morning she pours Teacher's over my belly and licks it off. That afternoon she tries to jump out the window.

I go, "Holly, this can't continue. This has got to stop."

We are sitting on the sofa in one of the upstairs suites.

There were any number of vacancies to choose from.

(Carver, *Gazebo*)

(2) Walking across the parking lot, she becomes fascinated by the sameness of the surface: so black and regular. She rubs the tops of her arms- more to protest the cold than to warm herself. When she was a little girl her father rubbed her arms for her.

(Ann Beattie, *The Parking Lot*)

上記のカーヴァーの作品もビーティの作品も単純現在形で、ト書きのように話の流れて行き、所々、過去形が顔を出し、現在形と非現在形との対比によって、現在形を前景化するとともに、現在形のもつ臨場感を読者に

生き生きと伝えている。記述文法で言うところの、いわゆる「歴史的現在」と呼ばれているものである。

(1)や(2)の事例以上に特殊とおもわれる事例はつぎの文章である。これはユアグローの「ミルク」という短編小説であるが、提示したこの短編の冒頭部分のみならず、はじめから最後まで徹底して単純現在形で話が構成されている。あの「歴史的現在」の用法から見てもさらに周辺事項と考えられるこの現象に関して、本稿では、単純現在形のプロトタイプとその周辺事例との言語現象を関連付け、(3)のように過去形との対比がなく、このような場合の単純現在形をどのように感じ、どのように他の単純現在形と体系的に説明を施せばいいのかなどを考察していくことにする。

(3)On a bet, a man climbs inside a cow. Once there he decides to stay. The cow's interior is warm and soft, although very dark. But the man's eyes get by with the driblets of light that do manage to seep in. Food is no problem: there's milk and more milk.

(Barry Yourgrau, *Milk*)

1. 現在時制の一般的扱い

単純現在形は、通常、状態動詞とともに用いられるが、当然、動作動詞であっても、習慣などの記述には使用可能である。Leech & Svartvik (2002: 66) の分類を利用して、まず、単純現在時制であらわす現象を見てみることにする。その構成は大きく3つに分類されており、「現在の状態」、「現在の動作」そして「現在の習慣」である。

(A) 現在の状態 [PRESENT STATE]

- (1) I'm hungry.
- (2) Do you like coffee?

この「状態」は「点」として発生した行為でなく、過去と未来の中にずっと伸びている「線」と考えられるものである。このように単純現在時制は、時の数直線上のどの点を取ってみてもその事柄が成立する「一般の真理」、

The sun rises in the east. などの事例も含まれる。

(B) 現在の動作 [PRESENT EVENT]

(3) I declare the meeting closed.

「閉会を宣言します」

(4) She serves -- and it's an ace!

「彼女がサーブ、サービス・エースです！」

この用法はかなり特殊なもので、正式の宣誓とか、スポーツ解説、実演の説明などに限られる。

(C) 現在の習慣 [PRESENT HABIT]

(5) I work in two elementary schools.

(6) It rains a lot in this part of the world.

Leech & Svartvik の言う「習慣」とは「動作が繰り返し行われている」という意味であり、一回の動作動詞で表現される「出来事」の場合は、とにかく限られた時間で行われるものである。これを進行相で表現すると、(8) のようにその動作が継続している面を強調することになる。

(7) The champion serves. It's another double fault!

「チャンピオンがサーブをしました。またダブルフォルト」

(8) The champion is serving well. (the service is a continuing activity)

「チャンピオンのサーブ、うまくいっています」

(Leech & Svartvik (2002 : 68))

未来の出来事で、カレンダーや時間表で事前に決定しているためとか、その出来事が変更出来ない計画の中に入っているためとか、未来が極めて確実な場合に、「単純現在時制」となる。

(9) Tomorrow is Wednesday.

(10) The term finishes at the beginning of July.

(11) Actually the match begins at three on Thursday.

(12) Miss Walpole retires at the end of the year.

(Leech & Svartvik (2002 : 79))

この4つの例文の中では、話者がその出来事を現実のものと捉えているので、未来の出来事に対して、話者の推量表現を言語化せず、断定表現となっている。

つぎの対比は、述語動詞が単純現在形と法助動詞 will を使用した際の意味の違いを示している。

(13) When do we get there? (eg according to the timetable)

「あそこには何時着かな」(例えば、時間表で)

(14) When will we get there? (eg if we travel by car)

「そこには何時頃に着けるかな」(例えば、自動車で行った場合)

上記の分類とはべつに、単純現在時制で過去の意味を表す場合を挙げており、「単純現在時制」で過去の意味を表す特別な場合を2つに下位区分している。

1. 歴史の現在 「過去の対話の中」で歴史の現在時制を使うことが時にはある。その場合は自分がいるところで起こっているかのように生き生きと描写することができる。

(15) Then in comes the barman and tries to stop the fight.

「その時、バーテンが入って、喧嘩をとめようとします」

2. 伝達動詞 (hear, inform, etc.) で「現在時制」も使用するが、より厳密に表現しようとするれば、この場合は「現在完了相」になるのが一般である。

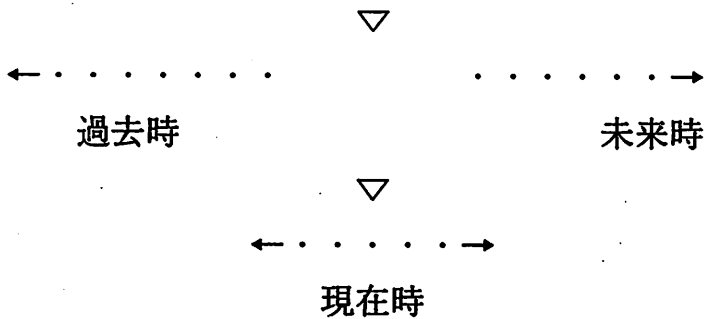
(16) I hear you've finished the building project.

(17) The doctor says he thinks I had a mild concussion.

(Leech & Svartvik (2002 : 74))

2. 時制概念の本質

そもそも英語において、現在時制と過去時制という2つの時制の範疇は、屈折接辞によって表される。未来時制には屈折接辞を用いず、助動詞を用いて迂言的に表される。そのことから考えて、英語の時制は現在時制と過去時制の二項対立で考察するのが妥当であると思われる。また、1節で概観したように現在時制は、2つの時制のうち無標のメンバーであるから、過去時・現在時・未来時のいずれをも指示することができるのである。この現在時制と過去時制との対立概念をさらに単純化し、イメージで捉えなおすと以下のようなになる。過去時を単純過去で表記することは無標であるために、これを考察の出発点としたい。



時制の議論でよく見かける「時の数直線」で考えてみる。この「時の数直線」は、言うまでもなく、時という抽象概念を数直線という、より具体的な空間概念に置き換えている。つまりメタファーを用いて、われわれは時を認識していることを裏付けるのである。逆三角形▽で示した三角形の頂点たる点が発話の瞬間である。数学での点の概念と同様に面積を持たないゆえに、時としての時間的幅はここにはない。瞬間、瞬間がこの線上を流れることになる。言語の概念としての「現在」はこの発話時を含む話者の「今・ここ」を感じさせる過去と未来を広く含むことになる。基本的にこの「今・ここ」と認識できるものが単純現在でカバーできる範囲である。未来に対しては基本的にその対象は断定できない内容なので推量を含意する法助動詞を用いたり、まだ実現していないことを示すto不定詞が好まれて使用されたりする。そして、「今・ここ」と認識できず、話者からの距離を感じ、事態を外から眺めることに対して「単純過去」を用いている。

この言語経験が現在時制のように事態の内部に入り、事態に自ら関わり、主体的に「感じる」といった、より主観的な用法に対して、過去時制は事態の外部に主体が存在し、事態そのものを客体として外部から客観的に眺めることになる。現在形と過去形のもつ意味の特徴をまとめると次のようになる。

現在形：主観・近い・感性

過去形：客観・遠い・悟性

過去形のイメージを的確に捉える鍵概念は「隔たり (distance)」である。Kilby (1984 : 24) では、The 'past' is a form specifying 'remoteness', and the 'distance' と過去形を特徴付けている。つまり、過去形の本質的な意味は「現実・リアル」からの距離感を前面に押し出すことである。仮定法過去の文における述語動詞のように叙実ではなく、叙想という unreal な対象を記述する機能をもつ。一方、単純現在形は、なんらかの意味で発話時と関連付けられているだけでなく、より主観的で記述対象に物理的にも心理的にも接近した場面に適応する用法である。

3. 主観性

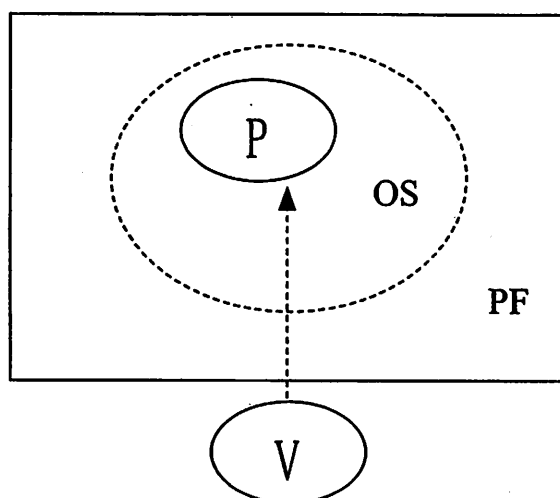
前節において、現在形の有する基本的な属性に「主観的」であることを示した。本節では、主観性とその言語表現について考察を加えてみたい。

see や hear などの知覚動詞は can とともに用いられる場合と現在単純形で用いられる場合がある。

- (1) a. I can see a bird. (鳥が見えています)
b. I see a bird. (あっ、鳥だ)
- (2) a. I can hear a bird. (鳥の声が聞こえています)
b. I hear a bird. (あっ、鳥が鳴いた) (Leech (2004 : 75))

中右 (1994 : 356)、木内 (1994 : 32) で論じられているように助動詞

が生起する節は、その性質が「状态的」である。一方、単純現在形の方は瞬間の知覚 (momentary perception) たるべく「主観」的直示表現としての解釈が可能である¹⁾。



知覚している個体 (a perceiving individual) と知覚された事物 (the entity perceived) との間には非対称性がある。つまり主体的に捉えられた事物は、非顕著的で、目立たず舞台の外 (offstage) にいる。対照的に、客体的に捉えられた事物は、顕著的に注意の焦点 (the explicit focus of attention) になって舞台上に現れ (onstage)、際立っている。

Langacker (1991: 317) によると、V (viewer) は PF (perceptual field) 内を観察しているが、概念化者である V 自体は、OS (onstage) と PF の外にいることになる。一方、P は、OS 内で特定の注意の焦点になっているという。このような関係において、V の捉え方を「主体的」と呼び、P の捉え方を「客体的」と呼ぶ。言い換えると、概念化者が onstage となることは、概念化者自身の姿が言語化されることで、カメラで俯瞰して場面を写しているようになっている。概念化者が PF 内に留まれば、主節現象 (main clause phenomena) の世界である。つまり、概念化者自身は客体化されていないので、姿は見え、この概念化者の視点で OS を捉えることになる。

Langacker (1991: 316) による「主体化」についての有名な例を提示しておこう。概念化者が PF 内に立ち立った状況は、メガネの所有者が、メガネをかけて外部世界を眺めたとき、そのメガネの所有者には、メガネ

の存在は見え、メガネとメガネの所有者たる主体は一体化していることになる。

さらに、主観性を含意している動詞に私的動詞と呼ばれるものがある。hear, learn, tell, ask のような、情報を受けたり、与えたり、求めたりすることを示す瞬間相 (momentaneous) の動詞は、ときに現在完了の代わりに現在時制で用いられる²⁾。

安藤 (1996 : 77) では ask, say, tell, write の類と hear, learn, find, read, see, be told, be informed の類を区別する。前者を「発信動詞」、後者は「受信動詞」。情報を受信したときは I hear としか言えないのであって、*John hears ということはできない。その意味で、受信動詞は私的動詞 (private verb) の一種である。また、Jespersen (1931 : 28) は、I hear/ I am told などについて「これらの場合は、以前受け取った情報が心理的に現在時に移行されている。なぜなら、意味するところは 'I know' であるからだ」と説明している。

(3) It cost an unimaginable twenty-two dollars. She tells me the way it works is that singers up North holler songs into an enormous metal cone, whereupon their voices are scarified in a thin gyre on a wax cylinder the size of a bean can. (Charles Frazier, *Thirteen Moons*)³⁾

(4) The o'clock news says that it's going to be cold.

(10時のニュースでは、寒くなるということだ) (Leech (2004 : 12))

(3) の tells me の現在時制は、内容的に I am told のために容認され、I hear を主節とする間接話法に相当するために容認されていると考えられる。つまり主体と出来事とが関連付けられた主体的内容であるために単純現在形が容認されている。受信者である 'me' [一人称] がプロファイルされるか、プロファイルされずとも off-stage の状態で事態の概念化者としてその場に立ち会っている場合、単純現在時制の使用が可能となるのである。

また、「私的動詞」はある条件のもとで二人称や三人称主語と共に用いることができる。

(5) a. Do you imagine he'll be there?

b. She smells something burning.

(Palmer (1988 : 74))

5a. のような疑問文では、話者の心理内容を尋ねることができる。また、5b. のように平叙文の場合は、話者の I think という文を代弁しているか、主語の心理を推測しているかのどちらかである。I think [she smells something burning.] という埋め込み構造で、I think は統語的にも意味的にも副詞類に格下げし、さらにプロファイルされずに行間に溶け込んでしまったと考えるのが妥当である。

(6) a. I'm suffering from a headache.

b. I suffer from headaches. (頭痛もちである) (Palmer (1988 : 74))

4. 単純現在形の個別事例考察

4.1. 単純現在の代表例

まず、単純現在形が成立する代表例として、つぎのような状態動詞による用法と動作動詞であっても習慣的現在を表現する場合が挙げられる。

(1) The pain in Mary McDonald's bones is not the old pain that she knows well, but a new pain. (Peter Baida, *A Nurse's Story and Others*)

(2) She reads her newspaper every morning and the growing number of hazards to be avoided constantly horrifies her.

(Richard Beard, *Damascus*)

素朴な疑問として何故、このような異なる現象に対して、同一の表現法が使用可能なのかということである。このことは、まさに人間の認知作用とかかわってくる問題であると思われる。それは認知意味論で主張されている「統合スキーマ」と「離散スキーマ」という仕組みによって説明可能である⁴⁾。よく例にあげられるのが、つぎに示すような、対象に対する単数・複数の扱いが概念主体（話者）の認知作用によって変動するというこ

ある。

(3) My family is here. (Barbara Delinsky, *Looking for Peyton Place*)

(4) His family were supposed to be looking for financial partners...

(Angela Carter, *Shaking a Leg*)

認知的な観点から、出来事に対する「状態」と「動作」という捉え方も同一のものである。状態動詞による「状態」という、その事象に始点も終点も考慮せず、絶えず存在しているという認知作用が基本としてある。それに対して、動作動詞の場合は、その一回、一回の出来事に対して「始点」と「終点」が存在し⁹⁾、時の数直線上に発生した点同士がまとまり、線として再認識されたためだと思われる。Quirk et al. (1985) や Leech (2004) で採用されている次の図も、一見、分散している単純現在形の諸用法に対して「統合・離散スキーマ」を援用すれば容易に関連付けができるのである。

発話時 (ST)

_____ 現在の状態
..... 習慣的現在
 . 瞬間的現在

(Quirk et al. (1985 : 180))

(Leech (2004 : 10))

4.2. 遂行動詞

ここでは、遂行動詞を中心に考察していくことにする。I declare や I tell you が遂行動詞の意味で使用される場合は、(5) のように that が生起しない場合が極めて強い。万一、生起した場合は、(6) に見られるように伝達動詞としての解釈となる。

(5) I declare I've never seen anything like it.

(6) I tell you that he's crazy. ≠ He's crazy, I tell you. (Bolinger (1972 : 23))

つまり、遂行動詞の際には that はない。一方、伝達動詞の際には that

は具現化可能ということである。これは、遂行動詞は後続する命題内容と一体化しているために、接続詞 *that* によって分断されることはない。この「分断」というのは、単に直感的な問題ではなく、指示詞 *that* によりその命題内容を概念化者である 'I' によって客観化されることである。このことは、*I wish* と *I hope* に後続する語彙的な制約と関連する⁶⁾。

いうまでもなく、動作動詞であっても「遂行動詞」はその性格上、発話のその瞬間に述語動詞の意味が達成されているので、常に現在形であり、下記のような過去形のものは「遂行」の解釈は成立しない。単なるある事実報告にすぎない。

(7) *I promised we'd pay her legal bills, as long as she didn't give it to anybody else.*
(Michael Crichton, *Airframe*)

単純現在時制で用いられると遂行表現を表すといわれているものが、進行相で用いられると、現在の行為の描写か未来に対する意志を表す表現となる。

(8) a. *We accept your offer.*
b. *We are accepting your offer.* (Leech (2004 : 8))

つまり、8a の文は「貴社の申し出、承知いたしました」の解釈だけが成立するが、8b の文は「当社は今、貴社の申し出の承諾を行っているところだ」という眼前の行為の描写する解釈と「当社は貴社の申し出を受諾するつもりであります」という未来に対する意図を表現する解釈とで曖昧である。

4.3. 瞬間的現在 (実況中継・手順のコメント)

また、厳密には、実況中継や料理の手順を示す場合、発話時という「現在」ではなく、発話の直後や直前であり、ある種の近似値的な「現在」と考えられる。

(9) *Black passes the ball to Fernandez... Fernandez shoot!*

(10) I pick up the fruit with a skewer, dip it into the batter, and lower it into the hot fat. (Quirk et al. (1985 : 180))

4.4. いわゆる歴史的現在

単純現在形は過去の事象を表現することができるが、それはそれほど単純ではない。同じ単純現在形であっても、過去との対比の有無がときによって生じるのである。

(11) a. The Thames flows through London.
b. We live in the country.

11a. の例文には過去との対立はなく、現在の状態を記述するだけである。しかし、11b. の例文の方は現在の状態を単に記述する解釈と、過去との対比を含意する解釈の2通りがあり曖昧文である。

また、伝達動詞 (verb of communication) は、現在時制において下記に見られるような用法で用いられるとき、その用法は、歴史的現在の用法である。この詳細は第3節で考察した通りで、ここではさらに例文を追加して例示しておくことにする。

(12) You applied last week for permission to go to New York on Saturday, to a matinee. Mr Davis tells me that for almost the first time since school opened you will be off bounds tomorrow. (F. Scott Fitzgerald, *The freshest boy*)

(13) "The paper says they know the man who killed him," said Tommy. (F. Scott Fitzgerald, *Tender is the night*)

さらに、眼前の不意に生じた事件に対して、反射的に感嘆の声を発する用法である。ここで進行形にしないのは、話し手の関心が<事実の報告>にあるからである。不意であるために外部世界を分析的に捉えることができないために、体感したままの記述となり、主観的な表現となっている。これに属する事例に感嘆文が多いことから領けることである。いわば瞬間的現在に分類されているものである。

(14)“ ‘Look, here comes John now.’ ‘That sounds pretty serious.’ ”

(Michael Crichton, *Prey*)

瞬間的現在の下位類に「特別な感嘆文」がある。

(15)Here comes my bus!

(Leech (2004 : 7))

(16)She grinned. “Hot! Just like I like it.” Now that we were back in the South, Mom’s accent had kicked in - the thickest sweetest south-Alabama accent you ever heard. Just lack I lack it!”

(Mark Childress, *One Mississippi*)

直示的な機能を持つ感嘆文は、いたって主観的であり、主体の現場に対する没入的感觉である。よって現在時制をとる。このように英語における単純現在形は、現在の状態を記述したり、発話時点の瞬間的な出来事を記述したりするだけでなく、このような論理的な時間関係を超越し、カメラアイと言ってもよい主体的な視点を時制として表現し、事象と同化させ、その結果として文体的には躍動感や臨場感などを獲得する。

4.5. 時・条件を表す副詞節内での単純現在形

最後に、学校文法ではあたかも特殊事項のように取り扱われる項目について言及しておく。それは、「時・条件を表す副詞節の中では未来の内容を現在形で表す」と言ったものである。そもそも時・条件を示す副詞節において、その時や条件は話者の判断であり、話者の主張でもある。つまり、仮定や条件はその節内容が前提かつ確実なものとして話者は議論の進行上捉えて話題を前進されるものであるから、当然の帰結として形式的に断定表現を選ぶことになる。結果的に、話者は心理的に事態をリアルなものとして捉え、体感するのである。このことは当該の命題内容に対して客観的に眺めることなく、あくまでも主観的に、それゆえに客観的な記述では、蓋然性を示す表現を用いるところを断定表現でもって表現し、その結果として単純現在形となっているものである。

(17) But we must be ready for him when he comes back. If we sit at the window we shall see him coming down the road.”

(Arthur Conan Doyle, *Beyond the City*)

(18) “Ladies, if you will please take your seats, we will now attempt to reproduce the event.”

(Michael Crichton, *Airframe*)

5. おわりに

本稿は、認知言語学の立場から時制、とくに現在単純時制を過去形と比較対照することによって、その特徴をより明らかにした。

一人称が言語化されれば、それは offstage からの事象接近であり、一人称が言語化されていなければ、onstage からの事象接近と考えてよい。いずれにせよ、カメラアイとして現場に出現し、出来事に立ち合っている。時間的にも空間的にも固定されたカメラアイではなく、スクリプトの流れに沿って絶えず、事象に即している。そのことが、文体効果としての躍動感に繋がっているのである。出来事の距離感がゼロとなり、主客の分離がなされていない状態である。通常の「歴史的現在」とは異なり、過去形がまったく生起していない言語表現である。これは主体の事象に対する係わり方の程度性であり、歴史的現在は当該の出来事に対して意図的にかかわってはいるものの、その意識の中には発話時点と出来事の発生時点の分離は存在する。つまり、ところどころ過去形が顔を出す余地を残している言語表現なのである。

注

- 1) 法助動詞は、確かに根源的用法ではなく、陳述緩和的用法の際には主観性を有するが、それは、客観的情報に対して、話者の心的態度を色づけ、反映させている表現であり、そこには、主体と客体との区別が存在している。
- 2) まず、「代用」という発想はきはめて「英語教育的」なものと考えられる。発話における語彙の脱落と、上記のような単純現在形と現在完了の互換性を同等に議論すべきでないことを本稿では主張する。現在完了は過去と現在の2つの事象を認知的に繋ぎ合わせる機能を有し、高次的思考過程を経るのである。これは「今・ここ」である単純現在形の主観性とは区別すべきもの

である。確かに現在完了は時制の観点から述べれば、現在時制ではあるが、アスペクトという別の観点が介入するために、現在の世界だけを切り取ったものではないのである。

- 3) 例文における下線は、すべて筆者による強調である。
- 4) Lakoff(1987:428)における over を巡る議論を参照せよ。この統合/離散スキーマという名称は、山梨(1995:127)が使用しているものである。
- 5) 瞬間動詞においては始点と終点が同一の点に存在する。
- 6) この制約はそれほど強いものではなく、そのような傾向性があると言ったほうがいいであろう。実際、最近の英語辞典などでも「that が通常省略」と記述されている。あくまでも「通常」であるということである。参考までに that が生起している例を挙げておく。

Nevertheless, I wish that physicists would refrain from using the word God in their special metaphorical sense. (Richard Dawkins, *The God Delusion*)

参考文献

- 安藤貞雄 1996. 『英語学の視点』 開拓社.
- Bolinger, Dwight L. 1972. *That's that*, The Hague: Mouton.
- Jespersen, Otto 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Vol. 4 London: Allen & Unwin.
- Kilby, D.A. 1984. *Descriptive Syntax and the English Verb*, London: Croom Helm.
- 木内修 1997. 「アスペクトに関する日英語対照研究」『白馬夏季言語学会論文集』VOL. 8, 25-34.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*, Chicago and London: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Stanford, California: Stanford University Press
- Leech, G.N. 2004. *Meaning and the English Verb*, 3rd ed., London: Longman
- Leech, G.N. and J. Svartvik. 2002. *A Communicative Grammar of English*, London: Longman
- 中右実 1994. 『認知意味論の原理』 大修館書店.
- Palmer, F.R. 1988. *The English Verb*, 2ed ed., London: Longman
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.